
百鬼夜行

Menori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百鬼夜行

【Nコード】

N9572G

【作者名】

Menori

【あらすじ】

暑い夏、薄暗い闇の帷の向こう。ごく普通の少女小夜達は決して生半可に語ってはならない百物語の大詰め百話目を、うやむやにしています。その代償は決して浅いモノでは無かった。小夜は見知らぬ場所へと空間転移してしまう。そこは日本の歴史の中で、物の怪達が最も色濃く絡む戦乱の世、徳川の支配下である安土桃山時代の小夜の住む町、三河市だった。素朴な少女小夜と、人を憎み、忌み嫌う妖怪達が彼女に尽くし、百鬼夜行を創る上で折り出す怖ろしくも切ない物語。人と物の怪が共に分かち合い、共に交じり合う事

は出来ないのだろうか。

序ノ篇（前書き）

初めましてMenoriです。初めて書いているこの物語は私自身はファンタジーだと思って、ジャンルはファンタジーにしているのですが、微妙なんです。

これからお話を考えていく内に、多分色んなジャンルが絡む可能性があります。
下の6つです。

ファンタジー

ホラー

恋愛

青春

歴史

ミステリー

です。

また、舞台が安土桃山時代なので、当時に活躍した歴史上の人物をオリジナルキャラとも織り交ぜながら登場させていこうと思っています。

しかしそうしていく上で、私の歴史の勉強不足によって、実際の歴史と異なったり、矛盾点が出てきたりしますが所詮ガキのかいたフィクションだと思って目を瞑っていてください。

そして次回からこの前書きは、主な登場人物の紹介と前回のあらすじになります。

まだまだ未熟だけど応援ヨロシクお願いします。

序ノ篇

——またこつちを見る——

「はあ。」

小夜の口から、ため息が漏れる。中2になって間もない。小夜がため息をつくのは何回目だろう。

「ええッ!!俺!?!」

自分の事が、とギョツとしたのは隣の席の石垣。

「ん?ああ、あんたもだけど、アイツよ。あつこの。」

小夜は、自分のクラス2-1のドアの前でボウッと突っ立っている
“アイツ”をアゴでさした。

「フーン。はつきりすればいいのにな。お前といた頃は、もうチョイ明るかったのにな。変わったよなあ、中野。」

——中野。中野悠子。1年の時、同じクラスになったのがきつかけで、一緒にいた元友達。

最初は丸顔で、身長145、6くらいで可愛くて大人しそうな子だなと思って、小夜は
仲良くなったのだ。

しかし、日を重ねるうちに彼女は小夜の悩みの種になっていった。

彼女の欠点は、極度の人見知りと、決断力の無さ、泣き虫、被害妄想癖にあった。

完璧な人間などいないから、小夜は縁を切ることも考えたが1年間耐え、2年になって

クラスが分かれた事を機に、彼女と離れた。そして今は彼女の苦手そうな友達を小夜は
周りに置き、学校生活を送っている。

流石に絶交はアイツの精神力の強さを考えて惨いだろうと、

メールの交換だけは、1、

2ヶ月の間していた。その中途半端さがいけなかったのかも
しれない。

初めのうち、彼女はいつも小夜と一緒に会う約束を持ちかけ
てきた。でも小夜はその度

にその約束を断ってきた。

するとある日のこと。メールの内容が、誘いのメールから、
『ごめん。』の謝りのメー

ルに変わっていた。小夜は彼女の被害妄想癖からだろうと察
し、一生懸命慰めの返信を

返した。しかしどんどんエスカレートしていき、やがて中野
悠子からの1日のメールの

件数が50を超したのだ。小夜も流石に恐ろしさを覚えて、
部活友達の有美と、晴菜に

相談した。「メアドを悠子ちゃんには秘密で変えたらいい」
という2人の意見に納得し

このいざごさは解決した。

「はあ！？悠子ちゃんに私がどれだけ悩んだか知らんでしょう！？
すぐ泣くから言いたい事言えないしさあ。それにストーリーみたい
な事するんだよ！！毎日50通くらいメール来るしさ！！」

HRが終わって放課後が来ても気づかずに、小夜はイライラを石垣
にぶつけた。

「ああ、だから小夜はメアド変えたのかあ。」

納得したように石垣がつぶやいた。小夜から返信が来なかったから
ビビってたのだ。

小夜は部活の時間になってもずっと話し込んでいた。石垣はサッ
カー部で行かないといけなかったが、小夜に付き合った。彼女と過
ごす方が楽しい。そう思った。

「小夜おおお！！」

小夜は自分と呼ぶ声の方向に顔を向けた。すると廊下にソフト部の練習着を着た有美と晴菜が手を振っていた。5時になってもなかなか来る気配がない仲間を心配して呼びに来たのだ。

「石垣イ！お前も。」

そう言つて有美の横から、サッカー部で、石垣の友達の相沢が顔を出した。相変わらずロン毛に気の弱そうな顔をしている。有美の彼氏だ。

「いい感じのとき、失礼だけど。」

にやつと有美と相沢が顔を見合わせる。小夜は顔が火照り出すのを感じた。2人はよくそうやって石垣と小夜をからかう。

こんなムードに疎い晴菜はポカンとして、見つめている。

そして、はッとして、

「有美ちゃんのクラスの怪談遊びに小夜と石垣呼べば！？私今日用事あるから帰るけど。」

そう言い残して立ち去ろうとした。その背中に有美が、

「彼氏君にヨロシクねえ」

有美はやたらとこういうのが好きらしい。ショートカットに真っ黒に焼けた肌。まん丸なクリンとした目に相沢もやられたのだろう。

「えッ！晴菜男いんの！？」

小夜は有美にびっくりして問うた。

「ああ。野球部の。」

有美より先に相沢が答えた。

「へえ」

小夜と石垣は同時に驚いた。

「ところで、うちの2・4で今日怪談するんだああ。百物語語るんだってさ。部活終わったら行かない？うちらも行く。」

有美の“うちら”はもちろん自分と相沢。

「俺はいいぜ。小夜も行くだろ！？」

「うん！！」

怖い話は好きだ。小夜は喜んで返事した。

そのつもりが、有美と相沢は違う意味に取ったらしく、2人で顔を見合わせクスツと笑った。

5時をとくにすぎていたが夏の空は明るく、遠くの蝉の音が五月蠅かった。

序ノ篇（後書き）

作品を読んでいただきありがとうございます。初めまして、Men oriと申します。

まだ中2になったばかりです。気持ちが入れやすいように主人公を中2に設定して私と同級生にしてみました。色んな人のもつても面白い作品を読み回して勉強しています。

私は国語が一番得意な科目で、文章を書いたり、読んだりするのが好きだったので小説を書くのに挑戦してみようと思って書いた初めての作品です。本を読むことは一番好きです。

小説は連載モノの方が簡単かなと思って短編より連載を選びました。

一応ホラーというジャンルですが、私の中ではファンタジーだと思います。1、2話ではまだ話が始まってません。まだ未熟な者ですから予想以上に前置きが長くなってしまいました。

ココだけ読んでも「え？青春モノ!？」とだまされた感じになってしまった方もいるかと思っています。ごめんなさい。“百鬼夜行”はまだまだこれからです。

次回もヨロシクお願いします。

怪ノ篇（前書き）

主な登場人物の紹介 神田 小夜（カンダ サヨ）14歳 AO
型

2 - 1でソフトボール部所属。天然で鈍感かつ単純なごく普通の中学生。

O型
石垣 翔太（イシガキ ショウタ）14歳

2 - 1でサッカー部所属。小夜とは幼なじみ。さっぱりした単純少年。

B型
萩野 有美（ハギノ ユウミ）14歳 A

2 - 4でソフトボール部所属。小夜とは部活仲間。明るく活発な神社の神主の娘。

AA型
相沢 尚哉（アイザワ ナオヤ）14歳

2 - 4でサッカー部所属。有美の彼氏であり、翔太の部活仲間。結構気が小さいビビリ。

中野悠子（ナカノ ユウコ）14歳
AB型 身長・体重 148cm 42kg
2 - 4で小夜の元友達。小夜を溺愛していたが小夜には利かず元を離れられる。見た目は可愛いが欠点多々有り。

松原 晴菜（マツバラ ハルナ）14歳

O型 身長・体重 161cm・49kg

2・3でソフトボール部所属。小夜の古くからの大親友で恋愛・オカルト興

味ゼロのソフト馬鹿。しかし最近野球部に彼氏が居るといふ噂が…。

前回のあらすじ 平凡な天然で鈍感かつ単純なごく普通の中
学生小夜は、中野悠子の

愚痴をサッカー少年のクラスメイト石垣に溢
していた。

そんな中へ4組のソフト部有美とサッカー
部相沢が、今夜自分達の

クラスでする怪談百物語に参加しないかと2
人を誘うのだった。

怪ノ篇

「ありがとうございますましたああ!!」

広いグラウンドに小夜と有美の声が響き渡る。グラウンドで片付けや整備をしていた2人の後輩や同級生は手を止めて、その手を振る。

引退してしまった先輩達がよく、ソフト部員は返事と挨拶だけは誰にも負けんかってよく言っていたので、小夜は返事と挨拶だけは大きな声でするように心掛けている。

2人はこれから、今日だけ片付けをサボって怪談話に参加するつもりでいる。ちょっとした罪悪感と沸々沸き上がる好奇心を胸に2 - 4 へ向かう。

いつもはゼイゼイする長い階段を苦になることなく登る。薄暗くなり始めた廊下を早足で進みながら教室に着いた。

「もう始まつてるみたいだね」

有美が教室を覗きながら小夜にそつと耳打ちする。

小夜は目配せして戸に手を掛け開いた。

「失礼しまーす。」

今度は有美は小さく言ったが小夜は、お構いなしにいつも通りの声で言った。

その声に反応して、中の人達がバツと小夜達を見た。

小夜が一步踏み出して中を眺めるとその中に、石垣と相沢もいた。

そして、悠子ちゃんも。参加しているのは全員で20人チヨイだろう。しかし蝋燭は流石本格的。ざっと数えると100ありそうだ。

しかし火が灯っているのは20本前後でほとんど終わっていた。

「おッ!遅えぞ。早くしねーと終わるぞ。」

小夜達に気付いて他組なのに仕切っている石垣と、早速ビビっている相沢が寄ってきて座れと目配せした。

小夜達は、壁の一隅に座っている悠子ちゃんとその周りを取り巻く同じく目立たない子達とはなるべく逆の出口側に座った。

小夜は順番が回ってくると小さい頃本で読んだつまらない怖い話を語った。

人々の話の中でも有美の百鬼夜行の話は本格的で、リアルな感じ怖いつてより興味が湧いてくる話で流石家が神社つてだけあるなど小夜は感心した。

やがて、周りがざわついて来たのに小夜は気付いた。気になって隣の子に聞いてみた。

「次で百話目なのよ。百話目を語り終えたら何かが起きるっていう迷信知らない？」

隣の子は、何が起きるか興味津々つて顔で小夜に語りかけてきた。

小夜は蠟燭の数を確認した。

その百話目にちょうど当たったのは悠子ちゃんだった。

「中野」

なかなか語り出さない悠子ちゃんに石垣が声をかけた。しかし怖じ気づいたのか恥ずかしいのか、悠子ちゃんは語り始めない。外は薄く赤に燃えていた。教室を照らすのは一本の蠟燭と外の灯りだけだった。

やがてこのざわついた空気に呼び出されたのか変な現象が起き始める。教室中から「カタカタ」と音が鳴り始めた。物が揺れるような。小夜は始め、誰かが悠子ちゃんにイライラして揺すってる音だろうと思っていた。教室は暗いから誰がしているのか分からなかったが。

「中野！！」

石垣の悠子ちゃんを呼ぶ声は鋭さを増していた。「カタカタ」と鳴る変な音は悠子ちゃんを急かしている様だった。

小夜はこの音は教室の至る所からしているように思えた。さっきより大きな音になっている。「カタカタ」と走り回っているようだった。

やがて何人かもこの音に気付いたらしく、

「おい！誰だよ、うるさいぞ！！」

と相沢が注意する声が聞こえた。

その一言で教室の人の声が消えた。しかしあの音は消えない。そして小夜のさっきの疑問は確信に変わっていった。「カタカタ」という音は教室のそこから中から聞こえる。

さすがの相沢もこれは教室にいる人の所為じゃないと思い直した。物が揺れているのではない。“何か”がいるのだ。

参加者のほとんどが半狂乱になった。

「小夜おおお」

有美が情けない声を出して小夜にくつつく。

実際小夜も泣きそうだった。何度も意識を手放しそうになった。

窓や戸側の冷静な何人かは窓や戸を開けるために立ち上がった。しかし、

「――戸が開かない!!」

1人が叫んだ。

すると窓側の1人が

「窓も開かないよう!!」

パニックを起こしそうな声で叫んだ。

「こ、このまども!」

その声で絶望した。有美が

「おもしろ半分でこういう事すると悪いモノを呼んじゃうんだって。お父さんが前言ってた気がする。」

と、半ば泣きそうな声で言った。小夜はおもしろ半分で来た事を後悔した。そして多分悠子ちゃんが百話目を語り出さなかった所為でもあるのではないかと小夜は密かに悠子ちゃんを憎んだ。

そしてもしかしたら、と石垣に向かって声を張り上げた。

「もしかしたら百話目を語り終わって百物語を終わらせた方がいいんじゃない!?」

と叫んだ。石垣は小夜に気付いて頷くと、

「中野!俺等と自分のためだと思って――」

石垣の声はある悲鳴に掻き消された。

「何よコレ——」

絶句した声の主が指さす方へみんなが向いた。

小夜も見た。一本の蠟燭の影があるはずのところに空中に空間が割れているのを見つけた。説明し難い、大きな割れ目。その隙間から、小夜は何かの景色が見えたような気がした。

周りは狂気そのものだった。耳障りな悲鳴と不気味な“何か”が走り回る音。

小夜はまたくらっとした。遠くで石垣の音がする。あの割れ目に吸い込まれそうになっている気がした。

そして小夜の目の前は真っ暗になった。

怪ノ篇（後書き）

こんにちは。Menoriです。

2作目も読んで下さった皆様。ありがとうございます。

今回も練るに練って2話目を完成することが出来ました。

・・・まだ物語は始まっていません。でも急展開させました（汗）
まだまだ勉強が足りなくなっていました。難しいですね。読者の皆様からたくさんアドバイスを欲しいです。お願いします。厳しいアドバイス下さい。

次回からやっと青春ほのぼのから脱出します。

ラストがホラーみたいになっちゃったんですが、個人的にホラーじゃないんで（汗）

あ、でも完全にホラーじゃないって訳でもないです。中間です。中途半端ですいません。

次回ともヨロシクお願いします。

電話 鶴 - 序篇 - (前書き)

主な登場人物の紹介 神田 小夜 (カンダ サヨ) 14歳 AO
型 身長・体重 153cm・45kg

2・1でソフトボール部所属。天然で鈍感かつ単純なごく普通の中学生。

石垣 翔太 (イシガキ ショウタ) 14歳
O型 身長・体重 159cm・48kg

2・1でサッカー部所属。小夜とは幼なじみ。さっぱりした単純少年。

萩野 有美 (ハギノ ユウミ) 14歳 A
B型 身長・体重 155cm・47kg

2・4でソフトボール部所属。小夜とは部活仲間。明るく活発な神社の神主の娘。

相沢 尚哉 (アイザワ ナオヤ) 14歳
AA型 身長・体重 160cm・50kg

2・4でサッカー部所属。有美の彼氏であり、翔太の部活仲間。結構気が小さいビビリ。

中野悠子 (ナカノ ユウコ) 14歳
AB型 身長・体重 148cm・42kg

2・4で小夜の元友達。小夜を溺愛していたが小夜には利かず元を離れられる。見た目は可愛いが欠点多々有り。

前回のあらすじ 4組で行われるという怪談百物語に参加するため、小夜と有美は部活

を半ば途中放棄して2・4へむかい参加した。

しかし、おもしろ半分に参加した所為で小

夜達は思わぬ“何か”を教

室に呼び出してしまふ。そして小夜は意識を

失ったのである。

電話 鵜 - 序篇 -

「チリーン——」

遠くで鈴の揺れる心地良い音がする。

私はその音でハッとなった。随分長く寝ていたような気がする。頭がボーッととなっていた中で、教室でのあの出来事を思い出してゾツとした。

でも周りを見回すとどう考えても教室ではない。私は今、目の覚めるような白っぽい橋の真ん中に突っ立っている。さっきまでココでボツと突っ立っていたのか。恥ずかしい。

考えるのも面倒臭くなったから橋の向こう側に見える商店街まで歩くことにした。

とにかくあの場所を無事に抜け出したんだから。

・・・にしても有美も石垣達もどこ行ったんだろう。ブツブツ文句いいながら向こう側の商店街に向かう。しかし途中で私は足を止めた。

「何あれ——」

近くに寄ってみたがあれは商店街なんかじゃない。簡素な長屋が並んでいるだけだ。胸をグツと掴まれる感じがした。

まるで時代劇のセットを見ているようだった。まるで15世紀ではないか！！

空は真つ赤で私は2回目の夜を迎える事になりそうだ。

時間も時間だから辺りに人気はない。

「どうしよう。」

途方に暮れていると、

「鵜に——やられたか？」

後ろから声がした。声を聴く限りで多分男性だろうと推測する。私は振り向いた。どうか悪い大人ではありませんように。

——にしてもさっきの鵜って——

「あ。地元の人ですか？わ、私、神田つていいいます。三河つてここから来たんだけどこつてどこですか。」

暗くて男の人の顔が見辛かったので顔は分からない。声からしてまだ20歳前後だろう。私はとにかくこの人に頼ろうと思って、疑わしいあの怪談の話からここに至るまで全て話した。もちろんあの怪奇現象のこともだ。

あんな嘘のような話を知らない人に語ったのには理由があった。もうすぐ日が暮れるというのに知らない場所にたった1人で気付いたら立っていたなんてとても普通じゃ考えられない出来事だったし、この人が言う“鵺”とは妖怪だと言うことに気付いたからだ。

百物語をしたあの日、昼休みに有美が言っていた。

「ねえ、小夜。妖怪つて信じる？」

「そうだねえ、見えないだけで居るんじゃないかな。なんだ？」

有美は神主の娘だから、私は彼女から面白い話をよく聞いていた。

「実はね、前から家にいると変な音が聞こえんの。家中から『カタカタ』つ

て。“鵺”じゃないかって父さんは言うの。音の感じとか。時期的に。」

よく有美からは怖い話を聞いたから、そんな時もまたでたよ。と笑っていたから忘れていた。百物語の時も同じ音がしたから、同じ妖怪なのだろうか。

「人の悪しき“気”に物の怪どもが群がることがある。にしても変

わった訛りだな、神

田殿は。此処は家康殿の領地の三河だ。」

彼は言った。あっちゃー、何かおかしいと思ったところ安土桃山時代ですか。

「あゝ私ひっくり返りそうなんですけど。」

泣きそうだった。まだ夢を見ているのか。疑いさえしたが常識的に考えてこの場でこんな嘘は無意味だろうと考え直した。またフラツときた。

「・・・!!」

慌てた彼はスツと私を支えてくれた。

「私迷子になつたみたいです。あ、迷子ってのは迷い人、ね」

今の言葉は分からないかもしれないと考えて付け加える。苦勞する。そして私は初めてこの人の顔を見た。長い髪を浅葱の布で束ね、真っ白な肌が薄紫の着物によく栄えている。顔はめっちゃ整ってて現代で言うイケメン。まさに美男色男って感じだが、不思議な容姿で妖艶だ。

私は行く当てがないので彼に必死に頼み込んで、お供することにした。

彼はニヤリと薄笑いを浮かべていった。

「怖い気づいて、逃げ出すことにならなかったらいいな」

その言葉通り私はこれから後悔することになる。

壱話 鵠・序篇・（後書き）

今回も読んでいただいた皆様。ありがとうございます。
やつと物語の幕が揚がりました。まだまだ勉強が必要ですが頑張つて続きを練るので、アドバイスや感想お願いします。

今回は主人公“小夜”の視点から物語を書いてみました。

“小夜”は単純な子です。

そして今回は敢えて、謎を解かずに謎のまま終わらせました。
次回もまた頑張るので応援ヨロシクお願いします。

武話 鶴・二幕・（前書き）

登場人物紹介 神田 カンダ 小夜 サイヨ 現代人

20世紀現代から、戦乱の世安土桃山時代へと迷い込んでしまった、平

凡な中学生であるはずの天然で鈍感かつ単純な14歳。成績も記憶力も実は良

い。歴史が中でも得意。美形好き。

前回までのあらすじ おもしろ半分で参加した怪談百物語で起きた思わぬ怪奇現象に巻き

込まれ、徳川の支配下に置かれる戦乱の世、安土桃山時代の三河に迷

い込んでしまった小夜。そこで謎の妖艶な色男に会う。小夜は為す術

も無く、彼にお供することにした。

式話 鶴・二幕・

すっかり暗闇に身を落とした三河の町を歩きながら、小夜達は泊めてくれる宿屋を探した。小夜は本物の戦国時代をこの目に納めることが出来るのを誇りに思いながら眺めていた。

小夜は道中、この男から色々な話を聞いた。と言うより聞き出した。彼は人を自分の話に引き込むのは上手いが話すこと自体は、苦手らしい。彼と話してみても小夜は不思議な感じがした。若い見た目より随分と大人で控えめな言い方をする。今まであったことのないタイプの人だった。

彼から小夜が聞き出したのはもちろん、まずは此処の時代についてだ。彼によると今は人間同士の戦乱の世にあるらしい。戦乱とは言っても闘うのは武将やお上の方の人達だけだ。私達平民や旅人にはあまり影響しない。どうせ生活は厳しいのだ。そして、ココ、三河は今、徳川の領地にあるらしい。どうせ私はまたこの地を去る放浪者なのだから誰の領地とて変わりはあるまい。と彼は言っていた。彼は旅人なのだ。

もう一つ聞き出した話は彼の素性についてだ。これからお供するのだから、包み隠さず話して下さいと頼み込む小夜をフツと妖艶な顔で見下ろすと馬鹿にしたように鼻で笑った。

小夜は少し苛つときたがそれを押さえ込んで見つめ返した。「名は無い。好きな様に呼べ。」と静かに言った。ちよつと他人を見下す態度とクールな態度はさっきから気に入らなかったが、世話になるし格好いいから…と小夜は前向きに考え直して、話題を変える事にした。「何をして稼いでるんですか？」と訪ねた。彼はまた鼻で笑うと「表向きの仮商売は万屋だ。本職の方でチョイと手に入れた“いいモノ”を売って金にしているが…その本職については…これから直に分かる。」そこまでしか分からなかった。小夜は仕方がないから彼を“万屋さん”と呼ぶ様にした。この世で“くさん”と人を

呼ぶ習慣がないのか、“万屋さん”は妖艶な顔を思いつきりしかめて、眉をひそめた。まあ他にないから仕方がない。小夜は知らない振りをした。

そして、小夜はさつきから考えている。それは、“万屋さん”は妖怪である“鵺”を追っているということについてだ。最初に小夜にあつたとき、彼は何より先に“鵺”に襲われたのかと問うてきた。それから推測するに、“万屋さん”は、ただ単に何らかの理由があつて“鵺”を追っている可能性もある。が、それ以外にもし“万屋さん”が“鵺”を追うことが彼の本職に直接関わっているのだとしたら、陰陽師か、妖怪退治屋か、そういうのを売る危ない仕事か……小夜は自分なりに整理し、これから何が起こっても対応できるように心構えた。

それにもう一つ、有美の数日前からの音と、百物語の時のあの音2つとも“鵺”が関係しているだろうと思つた。普段は気の強い有美が小夜にしがみついてきたくらいだ。それだけ似てたのか。

ということは、“万屋さん”の追っている“鵺”と私達を襲つたあの音の主は一緒ではないかと、小夜は一人で納得した。ならばあの空間の割れ目から私は引きずられていく感じがしたが、その時に一緒にあの場にいた“鵺”が来てしまったかもしれない。つてああッもう！！小夜はめんどくさくなって考えるのをやめた。どうせ直に分かるのだから。

そして“万屋さん”が私の予想した通りの本職だつたらこの考えを述べてみよう。小夜はとりあえずこのぐだぐだな推理を終わらせた。

小夜が推理している内に、とうとう町はずれに来てしまった。鈍感な小夜だが周りに灯り1つ無く、道を照らしているのは“万屋さん”が持っている灯籠だけだと察し、ここはさすがに危ないと感じ、“万屋さん”に声をかけた。

「さすがに危なくないですか？町に戻った方が宿、いっぱいあると思っただけど」

するとまた“万屋さん”は小夜を見下ろすと、

「それより考えたんだが、貴公に少しはまともな着物を与えてやらんな。私が皆の目を引いてしまう。」

彼がチラッと小夜の方を向いて言った。“万屋さん”の返事でやっと自分の無頓着でこの世では恥ずかしい格好をしていたのに小夜は気づき、今更ながらに恥をかいた。ソフトの練習着のままだ！そしてまた馬鹿にされたのに腹が立った。

小夜は特に話すこともなくまたしばらく獣道をもくもくと歩き続けた。何か言うとまた1つオマケが付いてくるからだ。

「あそこを訪ねてみるか。」

“万屋さん”が足を止めて指をさした。

一軒だけ孤立した宿屋らしき長屋はこれまた簡素で不気味だった。

小夜は思わず、

「えッ。」

と声を漏らしてしまった。すると案の定、お声が掛かった。

「そうか。ならこの道の真ん中で派手に野宿するといい。金もその方がかからんな。」

“万屋さん”は、妖艶な顔の薄い唇を憎たらしくつり上げて言うと、小夜を置いて長屋へ向かって歩き出した。

「嘘ですってばあゝゝ」

真つ暗な知らない獣道に置いて行かれそうになって、小夜は半べそかいて“万屋さん”のこの安土桃山時代には珍しい長身な背中を追って、その姿は闇に消えていった。

式話 鶴・二幕・（後書き）

四話目も読んでいただいた読者の皆様。どうもありがとうございます。あつという間に、話を進めることが出来て嬉しく思います。まだ、物語は頭に先ツチヨですからこれからもアドバイスや感想ヨロシクお願いします。

今回はまた客観的な視点に戻してかいてみました。そし濃いキャラ作りを心掛けてみました。

これからどんどん作り上げていくので応援ヨロシクお願いします。

参話 鵠・三幕・（前書き）

主な登場人物の紹介

神田 カンダ 小夜 サヨ

現代からやってきたフツの中2。

万屋さん（ヨロズヤサン） 身長188cm
妖艶な容姿の美男子。全く正体掴めず。人

を見下す目つきと、鼻で笑

うのが癖。

万屋をしている旅人。

前回のあらすじ
色々話を聞く小夜。

結局“万屋さん”のペースに載せられながらも、
そして怪しげな宿を見つける。

参話 鵒 - 三幕 -

小夜は、木目の浮き出た薄汚い天井を見つめていた。時代の味が
出ている。

小夜はさつきからワクワクしていた。よく考えたら、ココはあの徳
川に領地なのだ。心が躍った。

「なんかすごいかも!!」

小夜は一人しかないわずか3畳の部屋で叫んだ。

さつきから妙に肌寒い。現世でも夏で、ココに来たときも蝉の声
がしていたけ、ココでは温暖化が進んでないからだろうか。急に環
境だの、不景気だのと騒いでいたあの日が懐かしく思われた。でも
小夜は、鵒も往復してたつてことだし、ココにこれたんだから帰る
ことも出来ると、どこかで安心していた。

「みんな心配してないかなー、帰ってきたら何て説明しよう。」

小夜はいたらん妄想ばかりして、数分過ぎた。

当時では贅沢な方の布団も敷いて、仰向けになっではいたモノの、
まだ胸はドキドキしていてそわそわしていた。

「・・・にしても“万屋さん”おそいなあ。」

そのころ“万屋”は玄関で女将と話をしていた。その妖艶な容姿
のせいですっかり気に入られ、捉まっていたのだ。宿屋の全体は、

山中にあるとはいえ、まあ大層だった。簡素であるが、現世の戸建てくらいはあるだろう。

宿屋は夫婦で営んでいるらしくさつき、主人が奥から出てきて挨拶を交わしたばかりだった。年はともに60前後だろう。皺を作って笑う感じがよかった。子供は存在しない。はずだ。

しかし“万屋”は考えがあって敢えて、ココを選んだ。“万屋”は言葉を巧みに操り、探りを入れていた。

「今日は客は他にいないのですか。」

下駄を揃えながら女将に言った。

「ええ。ゆつくりしてくださいまし。」

女将は顔に満面の笑みを作った。

「明日発ちます。世話になります。」

「あら。お早いんですね。もう少しごゆっくりなさっても良いのですよ。」

“万屋”は頭を軽く下げ、小夜の向かった部屋に足を運んだ。なるべく早足で。しかし女将には、焦りを気付かれない程度に。

“万屋”のそんな後ろ姿を見て女将は口を吊り上げた。

「ふふ、もうすぐよ。もうすぐだからね。良い子にしてください。
坊や。」

もしそうだとしたら、急がなければ。“万屋”は急いで小夜の居る部屋の襖に手を掛け引いた。

「小夜!!」

“万屋”はきつい口調で小夜を呼んだ。

部屋で仰向けになって、何やらブツブツ言っていた小夜は突然の
声に飛び起きた。

「変わったことは？」

今度は少し声を落として聞いた。

小夜は、ん？と顔をしかめて、

「いや。どうかしました？」

小夜の落ち着いた顔を確認すると、“万屋”はまたあの意地悪い
顔に戻って、

「今夜、何か出るぞ。」

平静な表情で言った。

あっちゃ、そうくるか。

小夜は、顔を引きつらせた。

参話 鵠・三幕・（後書き）

久しぶりの次話投稿です。遅くなりました。まだ鵠編が進まず。
伸び悩んでいます。難しー。

しかーし、まだまだお話書いていきますんで。
ヨロシクお願いします。

今回も読んで下さった皆様。

ありがとうございます。

次回も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9572g/>

百鬼夜行

2010年10月9日11時20分発行